

vol. 10

選書者：森谷幸子

(こども本の森 神戸 館長)

●『子どもとことば』 著者：岡本夏木

学生のころ、言語の習得と絵本の関係について考えていたときに会った本。発達心理学の面から言語の獲得を考察していて面白い。「ことば以前のコミュニケーション」が子どもの発達にどう影響を与え、方向づけるのか。その人(子ども)の成長過程で、身体的に、感情的に、思想的に、自我意識的になど、ことばの獲得には多面性がある。
この度、また読み返し始めた。

●『裏庭』

著者：梨木香歩

木香歩の初期の児童文学。異世界の物語のように装って、かえって生々しい物語です。
読むたびに新しい視点が湧いてくるのが面白い。

●『サンタクロースの部屋 子どもと本をめぐる』 著者：松岡享子

こども向けの図書館サービスを担当していたころ、上司に薦められた本。図書館員にとっても大切なことがたくさん書かれているが、こどもに関わる方に読んでもらいたい本。私自身、行動できているかどうかは別として、何度も読み返してしまう。

●『おちやのじかんにきたとら』 作者：ジュディス・カー

ソフィーのいえに、とらがやってきました。けむくじらのとらは、すましたかおで「おちやのじかんに、ごいっしょさせていただけませんか？」といました。
普通では考えられないことが起こるのが絵本だ。
それが楽しい。

この絵本の著者はベルリンで生まれ、ナチスの迫害を逃れて国外へ移住した。そのこともあり、この絵本について大人の感じ方は様々だが、私にとっては優しいおはなし。これからもこどもたちと一緒に楽しみたい絵本です。

●『法隆寺と奈良の寺院 日本美術全集 2』 作者、責任編集：長岡龍

奈良の仏像好きなら必見の一冊。刊行のために新規撮影も行われたそうで、見たことのない角度からの鮮やかなカラー写真も収録されている。法隆寺の百済観音像の頁は観音開き(！)になっていて、大判の図集ならではの見せ方に圧倒される。
刊行後、書店に何度も通い、意を決して購入したことを思い出した。